

スロイス御貸家 絵図

著者	板垣 英治
雑誌名	北陸医史
号	40
ページ	41-43
発行年	2018-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2297/00052402



スロイス御貸家 絵図

金沢市 板垣英治

明治四年四月二日にスロイスは夫人とともに金沢に着き、初めは大手町の加賀藩医学館の隣の旧寺西邸に仮住まいをしていた。その後、講師宿舍が城内の玉泉院丸に洋館様式の建物が完成して、此処に同年半ばかりから明治七年夏の帰国するまで過ごしていたと言われていた。ところがその建物についての詳しい情報は明らかではなかった。

この程、石川県金沢城調査研究所の石野友康氏よりスロイスの住んで居た家屋の絵図があることをお教え頂き、早速、石川県立図書館で、「金沢城旧城郭総図並び建物部分図集」の第拾三図を開き、「スロイス御貸家 坪数三百八十七坪五分五厘」と記された絵図を目にした(図1)。

この建物は、スロイス御貸屋 百拾貳坪七步三厘(三二二・七㎡)で間口十四間、奥行き八間四尺で柿板葺きの屋根であった。これに厨房(厨裡)(四拾壹坪六分六厘(一三八㎡)が別棟として附いていた。少し離れた所に井戸(二間四方、四坪)があった。

さらに管理の安全のために番所(十六坪、三×五間十四方六尺の部屋)があり、門番五、六人がいた(1)。史料の図の左側に三間三尺の門(鼠多門)と、両翼に五間と五間三尺の建物があった。この橋(鼠多門橋)により金谷丸(現在尾山神社の地)に通じていた。さらに、三棟の土蔵がここに土塀様にあつた。図の左下には馬繋ぎ(一間×四間)があり、スロイスや番人が此処の馬を使用したと見られる。

この位置は金沢城の旧金谷丸(西之丸)であり、ここに前田利長(第二代藩主)が屋敷を構え、「玉泉院」と名乗っていた事に由来している(図2)

この玉泉院の詳細を図3に示した。図1に描かれた井戸、番所、橋、御土蔵の位置は図3の位置と同じであり、図1のスロイス御貸家は「あ」の武具方役所の位置に、新たに洋式建築物で作られたものであつたことが明らかである。この金谷丸跡に、明治6年に尾山神社が創建された。図4の鼠多門及び鼠多門橋の写真には、スロイスお貸家の屋根の一部が門の屋根の左側に見える。

玉泉院丸の庭園は昨年再建されて、一般に開放されている。

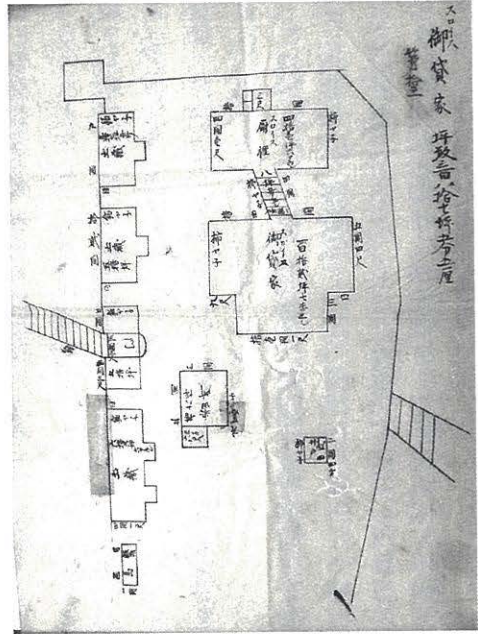


図1. スロイス御貸家 絵図
 金沢城旧城郭総図並び建物部分図集」の
 第拾三図
 石川県立図書館蔵。

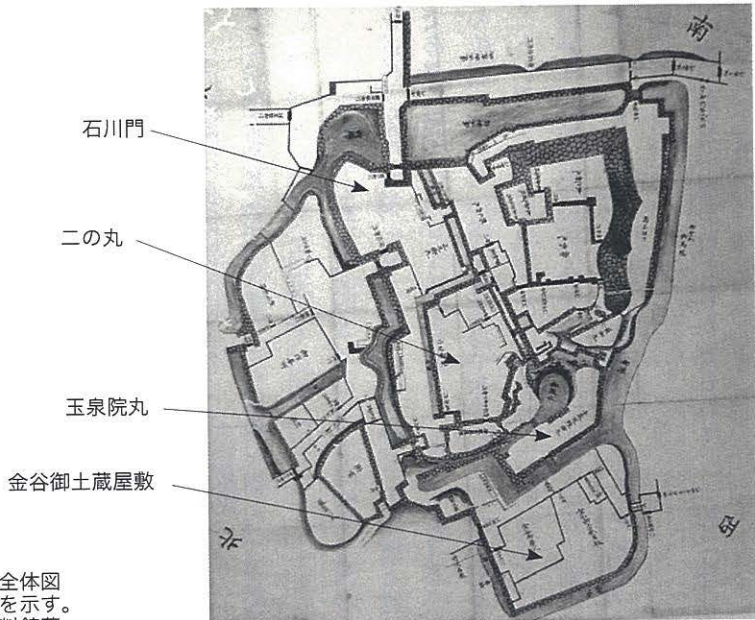


図2. 金沢城 全体図
 玉泉院丸の位置を示す。
 金沢市立近世史料館蔵

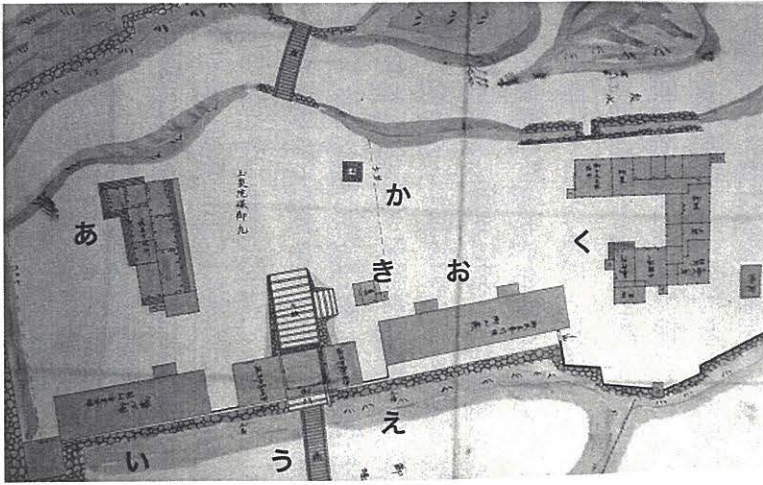


図3. 金沢城・玉泉院丸の絵図。金沢市立近世史料館蔵。

あ・武具方役所、い・御武具奉行預御土蔵、う・御書物奉行預、
 え・南御土蔵奉行預、お・御武具奉行預御土蔵、か・井戸、き・番所、
 く・奉行所、門・鼠多門、橋・鼠多門橋



図4. 金沢城・鼠多門の写真、
 明治初年の鼠多門および鼠多門橋の写真、金沢城門等 写真、金沢市玉川図書館蔵。
 左奥に見える建物がスロイス御貸家の屋根と推定される。

文献1. 日本医事新報 第七百拾号 昭和十一年四月
 十八日発行、五五、「スロイスの住居」